

新潟市教育相談センター
新潟市特別支援教育
サポートセンターだより

も え ぎ

第 116 号

令和5年1月25日
新潟市教育相談センター
新潟市特別支援教育サポートセンター
新潟市中央区西大畑町458番地1



「自分の存在そのものを 受け止める」教育相談センター

新潟市教育相談センター
所長補佐 加藤 智美

教育相談センターの適応指導教室「ぐみの木教室」を20年程前の小学校3年生から中学校1年生まで利用していた通室生が、現在「ぐみの木教室」に通室している中学生の前で先輩として、話をしてくださいの機会がありました。不登校になった当時、学校の先生とのかかわりの中で、「自分の話に耳を傾けてもらえなかったこと」がきっかけで、心が折れ、家から出ることができなくなると振り返っていました。その先輩が動き出すきっかけとなり支えてくれた人が、訪問教育相談員だったそうです。何回も家庭訪問をしてもらい、いろいろなところと一緒に出かけ、少しずつ行動範囲を広げながら、教育相談センターの適応指導教室に通室できるようになりました。しかし、すべてが順調なわけではありませんでした。先輩は、家では母親に反抗したり、「ぐみの木教室」にも来られなくなったりした時期もあったそうです。そのような時も、訪問教育相談員が、再度訪れて、「ぐみの木教室」につないでくれたと、感謝しながら語っていました。そして、「ぐみの木教室」で過ごした体験と一緒に過ごした通室生、職員スタッフとかかわる中で、自分そのものを受け止めながら、心のエネルギーを蓄え、社会人に

なった今につながったと語られました。

私自身も、「なりたい自分」と「できない自分」の間を揺れ動きます。「なりたいのならば、やればいいことでしょ」と簡単に考えても、実行できない自分に苦しみます。そして、「できない自分」に鞭を打ち、自分を責めてしまいます。そのようなときに、話を聴いてもらい、そのままの私の気持ちに寄り添って、理解してもらえることで、自分の存在そのものの意味を受け止め、前を向ける自分を感じます。「できないながらも、やってみること」「そのままの私を正直に書き残してみよう」と思い、今、この原稿に向き合っています。

教育相談センターと各区教育相談室では、教育相談、適応指導教室、訪問教育相談、夜間「学習・進路相談室」と4つの部門が連携しながら、新潟市内在住、在勤又は市内の学校に在籍する小学生から20歳未満の青少年とその保護者を対象に、不登校、いじめ、集団不適應など教育や養育に関する相談をお受けしています。相談者の声や気持ちを傾聴し、相談者の存在そのものを受け止めています。何回も相談を重ねながら、相談者の気持ちややりたいこと、できそうなことを丁寧に聴き取り、相談者の居場所になり、支援を積み重ねています。令和3年度の全国の不登校の児童生徒数は、過去最高の24万4,940人です。私たち教育相談センターは、悩んでいる皆様からの相談をお待ちしております。

令和4年度 作品展のお知らせ

日 時：令和5年1月27日(金)
会 場：新潟市教育相談センター
作品展示：10:00～14:10
音楽発表Ⅰ：10:30～10:45
物品販売Ⅰ：10:50～11:40
音楽発表Ⅱ：13:00～13:15
物品販売Ⅱ：13:20～14:10



3密を避けるため、午前と午後の開催となります。
事前の申込みをお願いします。

令和4年度 教育相談研究会

〈研究主題〉「今、求められている子どもへの支援」

日時 令和4年11月16日(水) 15:00～16:30

〈各室・訪問教育相談の活動紹介〉

研究全体会の前後に映像で紹介しました。感想をご紹介します。
・映像から、皆さんの日々の取組が分かった。
・栽培活動や体験活動が各室によって特色ある取組だった。
・説明の文字が多く、読み取れないことがあった。画面構成に工夫が必要だと感じた。



〈第1分科会・教育相談〉 社会的自立に向けた保護者との伴走

指導者 新潟青陵大学大学院 教授 佐藤 亨 様

今年度の第1分科会は「社会的自立に向けた保護者との伴走」をテーマに、グループワークと新潟青陵大学の佐藤 亨先生からのご講演という二部構成で行いました。グループワークでは模擬事例をもとに、参加者の皆様から、保護者と学校が伴走する多くのアイデアを出していただきました。各グループとも「父母と学校が連携・情報共有する」「本人の『強み』を見つける」という意見が共通していたと思います。一方で、「誰が」保護者と連携する窓口となるのか、本人の強みを生かして「誰が」関わるのかというアイデアが出にくかったように感じます。無意識に不登校支援は担任が行うものと捉えているのは、先生方の強い責任感の表れでしょうか。



つながりを絶たないための工夫として、一人で抱え込まないこと、複数人で支援し、きちんと役割分担をすることが大切だと感じました。佐藤先生のご指導では、「不登校の生徒に対して最初は頑張っ

て何とか関わろうとするが、会えなかったり変化が起きなかったり、息切れを起こしてしまう。関わりの頻度が減ることで、見捨てられた感覚が生じ、教員や学校への不信感につながる」とご指摘いただきました。保護者と伴走していくためには、自分が担任の間に解決しようとするのではなく、学級を受け持つ1年間、無理なく継続できることは何かを考えること、将来に向けて種をまく関わりが大切であることを教えていただきました。



また、学校の先生は子どものいろいろな場面を日常的に観察できるという最大の武器を持っているとお話がありました。日常の小さな変化を見逃さず声を掛けることで、問題を未然に防げることが多い。行動観察を続けることが、不登校の児童生徒を出さないことにつながると、予防の視点からもお話をいただき、大変有意義な時間となりました。

教育相談部では、これまでも保護者の思いを受け止め、児童生徒本人が自ら動き出すことを待つことを大切にしてきました。今後も引き続き、寄り添い型の支援を担う機関として、支援が途切れないうまく関わっていききたいと思っています。

〔第1分科会〕参加者の方々の声



- ・グループワークや佐藤先生のお話、大変参考になった。また、明日から子どもたちのために頑張りたい。
・まず、子どもと保護者と支援者と繋がっていきたい。
・とても勉強になった。学校に帰り、参考にしながら実践していきたい。
・どの班もグループワークの中心に情報収集を挙げていることが、印象に残った。



- ・様々な立場や学校からの意見を持ち寄ったことで、思いがけず新たな発見やひらめきを得ることができた。今後には生かしていきたい。
・一つの事例をもとに、ブレインストーミングで案を出したことで、目の前に対応している事例に生かせると思った。
・限られた時間の中で主体的に学べる研究会だった。
・分科会では、知りたいと思うことを分かりやすく話していただき、参考になった。
・改めて、児童・生徒と向き合う時に何を大事にするかが分かった。



〈第2分科会・適応指導教室〉 不登校児童生徒の『心のエネルギー』をためる支援の在り方

指導者 新潟大学大学院 准教授 田中 恒彦 様

第2分科会では、「不登校児童生徒の『心のエネルギー』をためる支援の在り方」をテーマに掲げ、適応指導教室での取組について、特に「支援者による日々の傾聴・相談」に焦点付けて発表しました。

不登校状態にある子どもには「心のエネルギー」が不足していると捉え、受容的・共感的な環境を整えること、すなわち、子どもの居場所を提供することで、「心のエネルギー」がたまっていくと考えました。支援シートを活用した具体的な事例から、大切にしているポイントとして、「本人の強みを生かすこと」「役割を分担すること」を挙げ、複数の目で子どもを見取り、情報共有することが大切であることを、学校現場に置き換えて提案しました。

続いて、グループワークを行いました。自分が困っている事例をワークシートに記入した後、グループの中の一人の事例を取り上げて、グループ全員で支援の方策を検討しました。どのグループも、ワークシートを基に、本人の強み、役割分担という視点から考えることができました。最後に、話し合いを踏まえ、自分のシートに立ち返って追記したり、感想を述べ合ったりしました。その後、検討した内容を、2つのグループから発表してもらい、全体でシェアリングをしました。

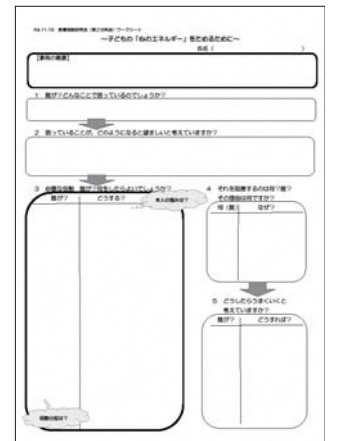
新潟大学の田中恒彦先生からは、『強みに注目す

る支援』という視点でご指導いただきました。

まず、シェアリングで出された事例を基に、グループワークで使ったワークシートについて、困っている内容と解決のヒントを可視化できること、また、意見交流を通して、思考やアイデア、情報を広げられることなど、価値付けていただきました。

その後、「ポジティブな行動支援(PBS)」と「チーム学校と多職種連携教育」についてお話いただきました。問題行動に注目する(問題行動を減らす)のではなく、できることを認めたり、活躍する場を設定したりして、望ましい行動を増やしていくこと、また、効果的な連携の在り方として、共通のゴールである目標と解決方法を共有した上で連携することによって重なりができ、連携が繋がっていくことを教えていただきました。

今後も、本人に対するよりよい支援ができるよう、学校をはじめとした関係機関と連携を深めていきたいと思っています。



〔第2分科会〕参加者の方々の声



- ・子どもが頑張れること、親が求めていることにギャップがあり、子どもも支援者側も振り回されてしまう。すり合わせの大切さを感じた。
・田中先生の話が分かりやすかった。
・ワークシートを書いてみて、生徒のことを分かっているつもりで分かっていないこともあるということに気付いた。



- ・多職種連携の大切さを学ぶことができた。今後、現場で生かしていきたい。
・グループワークを通して自分には思いつかなかった解決方法を聞くことができ、自分の実践に繋がりたいと思った。誰が何を困っているのかを改めて考えることが一番勉強になった。
・実践発表のスライドの最後2枚…傾聴・相談 学校現場ではどうすればいいか、個々を掘り下げて詳しく聞きたかった。
・他機関との連携は大切。保護者へのつなぎ方が難しいと感じた。
・子どもの自己決定を尊重し、無理なくできそうか一緒に考え、自己理解を促していく。



適応指導部の活動紹介

大切にしたい子どもたちの 「笑顔」と「学び」

適応指導部主任 松島 慎一郎

【マリニピア日本海へ行こう】

- ・リーダーをやって、まわり方や昼ご飯などをみんなで協力して決められてよかったです。
- ・最初は緊張してたし、楽しく協力して活動できるか不安だったけど、とっても楽しかったです。iPadで生物の写真をたくさん撮って、お気に入り撮れてよかったです。
- ・魚を見たり、イルカショーを見て癒されたり、少しはしゃいだりできてよかったです。

【ゆいぼーとアドベンチャー】

- ・オリエンテーリングや、海、キャンドルファイヤーなど普段できないことをたくさんできて楽しかったです。みんなといつもよりはしゃいだので青春を感じました。いい思い出になりました。
- ・今日で前よりみんなと仲よくなれた気がします。一番うれしかったことは、普段話したことなかった人と、お話できたことです。カベを超えられた気がします。
- ・キャンドルファイヤーでは、火を見ながら今までぐみの木でやってきたことを思い出して温かい気持ちになりました。

センター内にある「ぐみの木教室」では、学習支援を目的とした「チャレンジタイム」や他者とかかわる力を育てる「コミュニケーションタイム」を行っています。今年度も、様々な活動を通して、「自己決定すること」や「人、もの、ことにかかわる活動」を多く計画・実施してきました。

昨年度末の作品展や今年度の夏休みに予定していたチャレンジ・キャンプが、新型コロナウイルス感染拡大のため、中止になりました。コロナ禍において、様々な活動を計画・実施することは、決して簡単なことではありません。そのような中でも、子どもたちの笑顔と学びのために、できる限りの工夫をしながら活動を実施しています。

冒頭の感想は、子どもたちの行事における振り返りの一部です。子どもたちのいつも以上に輝いた笑顔を見られたことが、何よりもうれしかったです。

私たちは、様々な活動を通して、子どもや保護者、学校関係者の方の思いや悩み、ニーズに耳を傾け、連携を大切にしながら子どもの成長につながるよう支援・相談を行っています。子どもたちの学校復帰や社会的な自立に向けて、前に踏み出す「心のエネルギー」をためたり、子どもたち自身の「居場所」になったりするよう、今後も支援に努めていきます。

【市内の適応指導教室】

教育相談センター内「ぐみの木教室」…主に東区、中央区、西区
東区プラザ内…ぐみの木教室東区分室
北区「さわやかルーム」、江南区「そよ風ルーム」、
秋葉区「レインボールーム」、南区「おおぞら教室」、
西蒲区「スペースレスト」

夜間「学習・進路相談室」から

夜間「学習・進路相談室」主任 坂井 毅

夜間「学習・進路相談室」は、平成9年4月に開設され、今年度で25年目になります。

毎年、20人程度の中学生が通室しています。

その多くは、複雑・多岐な悩みを抱えながら、来室しています。例えば、朝、起きられない、外出が少々苦手・人と交わることに抵抗を感じる生徒などです。

最初、生徒の多くは、職員と「あいさつ」を交わせず、うつ向いて相談センターに通室してきます。

しかし、大人が生徒の可能性を信じて生徒の味方になると、生徒に「自信」が生まれ、「自信」は、困難を乗り越え、「前に進むエネルギー」に変わります。

これらを踏まえ、職員は、通室する生徒に様々な場面で「言葉のシャワー」を浴びせることで、「自信」につながることを意識して接しています。

生徒は、通室を重ねることで、少しずつ変わっていきます。「学び」の経験が乏しい生徒は、「学び」を楽しめるようになり、自分のやりたいことや夢を語れるようになりました。また、家族への「感謝の思い」を行動や言葉で表せるようになりました。

送迎する保護者の方も、通室して学習する生徒の努力を認めることができるようになりました。

中学生という多感な時期に夜間「学習・進路相談室」で体験できた多様な学びや喜びが将来に役立つように、一人ひとりに寄り添い、生徒の「伴走者」になり、最大限支援していきます。

伝えていきたい和の暮らし

適応指導教室 茶道講師
三保 恵美子



今年も茶の湯体験が終わりました。3回の体験でどんなことを学んでもらうか。参加者はどんなことを求めているのか。いつも試行錯誤の繰り返しです。

はじめ緊張していた皆さんがお茶や茶道の話聞き、お菓子をいただき、お茶碗を温め、自分で点てたお茶を口にしたとき、「おいしい」「苦い」などと言いつつも楽しそうな様子を拝見すると私の方まで楽しくなります。

最終回は白山公園内の燕喜館まで歩いて行って、座敷で実習です。お客様役とお茶を運ぶ役に分かれ、交代でお茶をいただきます。お客の役になった人は、正式なマナーで座敷に入り、床の間を拝見し、炉を拝見して自分の席に座ってボランティアのお点前を見ながらお茶を運んでもらっていただきます。正座をします。席が終わるとみんな足がしびれますが、結構非日常を楽しんでいるように見えます。休憩時間には隣の部屋の畳の上でストレッチをする姿について微笑んでしまいます。

最近は畳のない家が多くなり、座敷を正式に歩くことも少なくなりました。しかし日本文化としての畳のよさはずっと守り



伝えていきたいものです。本来お茶はお客様に点てて差し上げるものですが、コロナ禍でそれも難しく体験では自分で点てて飲むようにしています。そんな中で一碗のお茶のおいしさ、いただく楽しさを皆さんの心に残していただければと願っています。